
もっばらの噂

雨霧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もっばらの噂

【Nコード】

N5595D

【作者名】

雨霧

【あらすじ】

日々厄介事に頭をつっこんでいる利推と、何処へ行ってももっばらの噂になってしまいう麗人、緑李。エルバラーシュの門番小屋で出会った二人の物語。一章完結しています。

もっぱらの噂、発動。

もっぱらの噂よ あの流れる様な 絹の様な緑の髪が

もっぱらの噂よ あの気品の高い 宝石の様な青い目が

もっぱらの噂よ あの気の強そうな 深雪の様な白肌が

男は現れた。

既に錠の下ろされた門の向こうの番人をこき使い、開門させた彼。門番からすればただの迷惑な客——と、行かないところが彼の人望の為す技であろうか。今まさに彼は、夜間にも関わらず通行しようとした男を苦ともしない素晴らしい門番の笑顔と、その後ろにそびえる灰色の街——エルバラッシュに迎え入れられた。

その日の前日、街に住む老齡の元門番は、昔の部下であつた現門番長を訪れた。その理由は、姪を名誉ある「門番」である立場から迎え入れたい為、一日だけ職務復帰したいという内容だった。仕事を代わってくれることに問題はないので、門番長はそれを快諾した。しかしやはり——前の上司であり信頼している人物であるとは言つても——彼はもう老齡。心配ではあるので、当日門番長と共に当直の当番であつた新人の男を一人残すこととした。最初は自分が残ろうと思つていたのだが、新人の男が是非自分に、と言つてきたのだ。日ごろから仕事熱心なゆえ、昔の門番長でもあつた元上司の話を知りたいらしいという事を伝えると、老人のほうもそれを許可

した。

——かくして、この夜である。

何がどうなって、こうなったのか。

まったく新人のその男には分からなかった。

——一体、どうして。

「いや、本当に有難うございますじゃ」

「いえいえ、そんな。大した事はしておりません」

…… 本当に、何が起こったのだ。

新人の男は、そう思わざるを得なかった。

その日の、そろそろ閉門の時刻になりそうなときの頃であった。

例の話の姪はまだ来ず、老人の方はうろろと辺りを歩き回っている。これでは話が聞けるはずもない。そうこうしているうちに日が橙色に染まり始め、閉門の時刻まであとわずかとなってしまった。こうなつては老人ばかりか新人の男の方も、話が聞けぬなどと言っている場合ではない。野宿は嫌だと考えて、街に入ろうと駆け込む旅人達一人一人のチェック片手に、老人の姪のことを聞き、見なかったかと問う。しかし答えは皆一緒——知らない、という事だった。

そろそろ閉門の時刻となる。もう数時間も前に、同僚や門番長たちは帰ってしまった。頼るべき人もいず、新人の男は頭を抱える。一方老人は心配どころか心臓の止まらん勢いで、それを見た新人の男の方も少し焦ってくる。どうしよう、どうすればいい。列の最後の旅人に聞いても答えは……否、知らぬ。そんな女は道中では見えない。

がつくりと肩を落とし、二人の門番はあらぬ方向ばかりみてぼうつとしていた。そして日がちょうど山の中に入ろうとした——その時であった。

「失礼。こちらのお嬢さんは門番の方の姪らしいのだが、叔父は貴方でしょうか？」

男であった。ひらりと長い黒マントが、橙色の日によく映えていた。影で顔は見えにくい。しかし、灰（……いや、銀だろうか。とにかく薄い黒の色である）眼鏡をかけ、新人の男の方をしっかりと据わった瞳で見つめている事だけはよく分かった。

「……失礼？」

男は、返答のない門番を疑問に思ったのか、そう声をかける。門番は、ぼうつとその男を見上げていた。正確には——男と、その後ろにいる、先程から聞いていた姪の特徴によく似ている少女を。

そして——今、この男は何と言った？

だが新人の男が考えるより先に、老人の方が動いた。

「フェリ！ フェリではないか……ああ、心配したのだよ。どうしたのだい」

「伯父様！」

二人は抱き合い、涙を流さんばかりに嬉しがっている。とても可愛がっている姪だ、と言っていたから、きっと二人、仲がよいのだろつ。

と、その時。

「おやおや、感動の再会、とても言ったところでしょつか」

完全に雰囲気をぶち壊した一言だが、しかし誰も何も言わない。少しして、老人はためらいがちに声を出した。

「ああ、えっと……姪を連れてきて下さったのは……」

貴方ですか、という続きの台詞は殆ど声になっていなかったが、男にも——そして姪にも、その意図は伝わったようだった。

「そうよ！ 彼が……彼が私を助けてくれたの！ かれ、とってもいい人よ。伯父様」

「た、助けたつてお前。何か危ない目にでも……」

「ええ。彼女はちよつと盗賊に襲われていたようでしたね」

「と、とうぞく……」

ええそうです、と微笑む男を横目に、新人の男は唇をかむ。仕事熱心、と言われた男ではあったが、実はそれは少し違う。彼はただ、とても負けず嫌いなだけであつた。他の者が褒められることが許せぬのは当たり前、自分だけが褒められ、他の人間は自分が保護してあげねばならない——そんな風に、思っているところがその門番にはあつた。

「さて……では、そろそろ私はこれで」

そう言つて踵を返す男の後で、新人の男は頬を緩ませた。そして、老人の方に向く。

「さて、では中に入つて話でも……」

「——ああ、待ちなさい！」

なに、と、老人の言葉に門番は目を丸くする。

橙色に染められたマントが翻る。

「——はて、何でしょう？」

全てを了解したような笑みだつた。

「ねえ、それでそれで？」

可愛らしい声が部屋に響く。

——なるほど、これでは確かに老人の方も姪が可愛くなるだろう。

男はそう納得した。先程の、マントの男だった。

あれから（考えた通りに）男は門番達が宿直で使う部屋の中へと通された。セキュリティレベルの高い門番の部屋の中に入れてもらうなど、並みに出来る事ではない。

その上スープとパンまでおごってもらい、更には泊めてもくれない。謝礼と称された少しの金銀も貰った。これはさすがに予想外な出来事で、少し申し訳ないと思った男は、お礼代わりに何か旅の話でも、と切り出した。

——そして、今である。

「おや、まだ続きが必要ですか？」

「え、そんな。ずるいわ！　ここまで話しておいて、やめるなんて手を前に組み、老人の姪は、お願い、と言う風に首をかしげた。

——まあまあ、ですかね。

それなりに愛嬌があつて可愛い娘だ、と思いながら男は話を続けていく。

「そして、その男は呪いにかかつてしまったわけですが……、そのときに私はそいつに言つてやったのですよ」

「何て？」

「私は——」

と、そこで男は口をつぐみ、何かを考えるように窓の方をちらりと見た。

「あら、どうしたんですの。またもつたいぶつていらつしやるの？」

「いえいえ、そうではなく……あー、伯父さん、聞こえませんかね。

その……音が」

「おと？」

老人は首をかしげる。が、一瞬後、はつとしたように立ち上がった。

た。

「これは……どうした、ことだ？」

その『音』とは、ギィイ、という、何かが軋むような音だった。

——すなわち。

開門の音、である。

もつぱらの噂、発動【2】

鳴り止まぬその音に、老人は更に首をかしげた。姪の方も、何かがおかしいと気づいたか、不安そうな顔をしている。

——はてさて、どういう事でしょう？

「失礼。この街の開門時間は、夜明けから日暮れまでであるというのは私の記憶違いでしたか？」

男は椅子へと座り直しながら言う。目元がわずかに笑っていたのだが、誰もそれに気づかなかった。

「いや……たしかに、そうであったとわしも、思う、のじゃが……」
分らない、という風に、老人はその後首をふる。

——やれやれ、ですね。

道中、高貴だが何だか困った様子の少女を見つけ、普段は無視するところを助けて連れて来てみれば、なんと彼女は門番の姪だった。それを使いタダの宿とタダの飯（謝礼も含めれば実質プラスである）を手にいれた。

そこまでは、いい。順調である。
が、そこからだった。

なにやら先程からもう一人の門番の方には殺意のこもった目を向けられるし、しかも今は開門の音がしていたりする。

——どうも私はやかいごとを引き込んでしまうようですな。

面倒な話です、と、自分で自分を慰めるように思いながら、男は椅子により深くかける。そろそろ眠いというのもあった。

しかし、眠いながら、この事件はやはり妙だと思い直す。

この街の開門時間は、『太陽が沈むまで』。これは他の街に比べると少し早い。加えて旅人の通行チェックも厳しいで有名である。それゆえか、この街は治安が良い。勿論犯罪を犯すのは外の人間だ

けではないが、それでも何かしら影響は与えられるものなのかもしれない。いや、与えられるだろう。新しいもの、新鮮なものというものは、よくも悪くも影響を与えるものであるからだ。

街の治安の第一線とも呼ぶべき開門チェック。そのような仕事であるとは自負している分、門番達の規律は厳しい。それはこの灰色の街、エルバラージュでも例外なく言えることであつた。

——そして、その「街の治安の第一線」と呼ばれる開門が、他の街よりもチェックが厳しく閉門の時間も短いこの街の開門が、真夜中に行われるとは何事か。

「おや、そういえばあの男は何処です？」

何気なく見渡した部屋の中に、一人の若者がいないことに気づいて男は言う。

「あの男？ ああ、そういやさつきから姿が……」

「あら。さつき、部屋を出ましたわよ、彼」

「何？ 夜に門を見回るとは、噂どおりに仕事熱心だが……しかし、どうして門が開くのだ？」

「さあ。重病人でもいたのかもしれませんが。だとしたら、手助けに行つた方が良くかもしれませんね」

男は微笑んで立ち上がる。しかし、それとほぼ同時に、音が鳴り止んだ。

「おや……止まりましたね」

窓の方向を向き、耳をたてる。何も音はしなかった——いや、一つだけ、した。

足音である。

ついで、キイ、という音。戸が開く音だつた。

その音とほぼ同時に、老人は声をかける。

「おお、どうしたのじゃ。聞いたか。今、開門の音がしよつた」

焦りも含められた老人の声に、若い門番はにこにこ笑つていた。

「いえね、今一人……くふふ」

「なに、何なのだ」

「いえいえ……へへえ」

「へへえ、つてお前。もう閉門の時間は過ぎているんじゃないのかい。もう外は真っ暗じゃないか」

「真っ暗ですなあ」

「ははは、と笑う若者。これはおかしい、と、マントの男は思った。それは姪や老門番も同じことで、二人とも異様なものを見る目つきで彼を見ていた。

「綺麗な綺麗な、女を一人、通してきたんでさあ」

老人は目を見開く。姪は一步、若者から遠ざかった。マントの男は窓の外を見る。

——これも恐らく、厄介ごと、なんでしょうねえ。

そう、きつと。

その戸の外に、若者の言う、「綺麗な綺麗な女」が立ち尽くしているのを見つけてしまったことも、きつと厄介なものなのだろうな。そう、男は思った。

もつぱらの噂、発動【3】

「それで、それで……お前、入れたのか？　そんな、旅人を？」
老人は震えた声でそう言った。

そりゃあそうだろう。職務復帰したちようどその日に、部下が問題を起こしたのだから。老人にしてみれば、心臓がとまってしまうようなことであるに違いない。

「はあ……それで？」

マントの男は、窓の方をちらりと見て言う。
途端に、老人がかわいそうになってきた。

——単に、姪を迎えたい、という、それだけのことであったろうに。

「それで、って申されましても……そのですねえ、その女を、此処に泊めてやってはくれませんかねえ」

若者の門番は薄ら笑いをした。それを見て、老人が今にも憤激せんばかりの表情をしているという事さえ分かっていない。

男は苦笑して、もう一度窓の方を見やった。寒げにしている。

——と、そこで、妙なことに気づいた。

「あれは……」

女の服装のことである。その女が着ているものは、夏用の服であったのだ。

最近の流行は、少し重たい感じの服だから、夏用とは言っても半そでではない。しかしだからと言って、冬に着るものではない。そ

れに、あれは貴族の服のようだ。ならば尚更。貴族服は、道を歩くためのものではない。館で一人読書をしたり、晚餐を開いたりするときに着るものだ。決して、生活に向いている服ではない。

「あれは……凍傷になりますね」

ぼそりと呟いた言葉は、姪の耳にわずかに入ったようだった。

「え、何とおっしゃいましたの？」

首をかしげる少女の顔と、寒げにしている外の女とが重なった。もつとも、外の女の方の顔は逆光であまり見えないのだけでも、それでも、身長や腰のくびれがよく似ている。

「……お助けしてあげましょうか。貴方を助けたのと同じように」「え？」

少女は分からないという風に男の顔を覗き込んだ。それに笑ってやってから、男は戸を開ける。口論していた老人と若者の門番が振り向く。姪の視線も感じられた。

ひゅうつ、と、風が室内を軽く荒らす。開けてもらったことに気づいたのか、女は俯けていた顔を上げる。

ぱさりと、雪よけに付けていたのであろう布ずきんが落ちた。瞬間、女の顔があらわになる。

長いまつげ、通った鼻筋、小柄な体。

それも文句の付け所のないほど素晴らしいが、一番に惹かれるのは目と髪、それと肌であらう。

宝石のように輝き、何か絶対的な力を宿したように見える青い瞳。絹糸のように肩から腰にかけて流れる美しい緑の髪。そして、何よりもこれが正しいと、呆然と思ってしまうほどの白い肌。

世界中の賛美を、全てこの女性に与えてしまっても構わない。い

や、それでも足りない。——そう、思わせるほどの美貌。
そして彼女は、その整然さを少しも失わず、微笑む。

「我れが名は緑李と申す。我れが名を覚えておく事を、そなたらに許してやるうぞ」

その場で、何か言うものは誰もいなかった。姪は口をあけばかんとして、老人は腰の抜けたような顔をして、若者は薄ら笑いを浮かべていただけである。

ただ、それだけである。

そして、マントの男——利推は、というと。

ああまた厄介なものが、と思いながらも、笑みだけは絶やさずに、戸をあけたことに少し後悔しながらため息をついた。

もつぱらの噂、発動【4】

「して、此処は何処じゃ」

老いた門番は、今にも倒れそうであつた。

フェリのほうもおろおろとするばかりで頼りにならず、若い門番はというと、女——緑李の美麗さに惑わされているのか、話にもならない。

仕方ないな、とため息をついてから、利推は緑李を見下げた。

こりゃあ本当に美しいな——と、そんな思いを何とかこらえるように目を何度か瞬いてから、緑李に向き直る。

「私は利推と申します。して、緑李様はどうして夜に門を開けさせたので？」

緑李『様』、と呼んだのはただの戯れであつたのだが、女は何故かとても嫌そうな顔をした。

「何を言うのだ、お前」

「あーいえ、申し訳御座いません。そのように不快にさせるつもりは……」

「つもりはない、だと？ 私は、『此処は何処だ』と聞いたのだぞ。何故関係の無いことを言う」

そつちか。

利推は目玉が出そうな思いに駆られながらも、とりあえずは笑みを浮かべていることが出来た。それはすみませんでした、と謝ると、緑李は機嫌を直したようだ。

「では、私の問いに答えよ。さすれば、お前の問いにも答えてやる」

「それは嬉しいことで。此処は何処かという事でしたね。此処は門番が宿直で使う小屋です。では次はこちらから質問ですが、何故夜に、門を？」

「うむ。道中、なにやら山賊に襲われてな。話しかけても言葉は通じようだし……あれは同じ言葉をしゃべっていると思つたのだが、

山賊の言葉というのは、よく似ているが違ふ言葉なのか？ まあともかく、宿も貸してくれんようなのでそのまま無視して来たのだが、なにやらしつこくて……すると、運よくこの街を見つけてな。それで入ってきたのだ」

微笑む顔は酷く美しいが。

声も美しく美声としか言いよもの無いものであるが。色々と、論点がずれている女だなと利推は感じた。

山賊に言葉が通じない？

そのまま無視してやってきた？

普通、女が山賊に出会ってから街へと入門するならば、泣き叫び、命からがら戸を叩くはずだ。そのような旅人であれ、門は開かれな
いことの方が多い。であるから入れてもらえたときにはもちろん感謝して、場合によってはいくらかの礼金を門番に握らせておかななくてはならない事も少なくはない。

だが、この女はまるで夜の入門が普通であるかのように言ったのだ。
入ってきた、と。

「あー……」

何も言つべき言葉が見つからず、利推は視線を泳がせた。

何だ、どういう事なのだ。

美人だと、このように感覚が狂うものなのか。確かに、そのような感覚が狂うほど甘やかされ、愛されていてもおかしくない美貌だ。事実、あまり女に興味がなく、人の美というものには鈍感であると自負している利推でさえ今、おちかけている。

ぼつと利推はしばらく女を見つめていたが、やがて、ところで何か喰うものはないか腹が減ったのだと小屋の中を探索しはじめた
緑李に気づき、弾かれた様に動き出した。

「緑李様、とりあえず……今日の所は眠りましょう。ね？」

夜も遅いし、明日になれば門から出してやれば良い。若い門番のことは老人に任せておいて、自分はまた何処かへ旅に向かえばいい

——そう想い、利推は緑李に眠ることをすすめた。
の、だが。

「嫌だ。私は飯が食いたい。飯はないのか？」
ずっずっしい女だな、と思う。が。

きつ、と向けられた瞳を見返していると、そんな事がどうでもよく
なってしまった。

——多分、この女には、勝てない。

利推はそう確信し、さてまた面倒ごとだなと思いながら、門番の
姪——フェリに向かってこう言った。

「先程のスープ、余っておりますか？」

ああなんて自分はやかいことが好きなのだろう、と、自分への
呆れをも含ませたため息をこぼしながら。

もつぱらの噂、発動【5】

少しお待ち下さいね、と、利推はとにかく緑李を椅子に座らせた。それから、フェリが持つてきてくれた鍋を火にかけ、顔面蒼白の老人をとりあえず家へ帰らせる。フェリにはいてもらわなくては困るので、また折り返し来てもらうよう頼んだ。

……新人の門番に関しては、さして利もなければ害もないので放っておくことにした。

「食はまだか？」

「ええ、少しお待ち下さいね緑李様」

利推は微笑んでから、そんなに早くできるわけないだろうと緑李に呆れた。——いや、呆れようとした、のだ。

気持ちが一方向にしかはしっていない状況というのは、自分で思うよりもとても危なっかしい。だから利推には、理性を取り戻す必要性があった。だから、いつも慣れているこのような面倒事も、呆れてみようということさらにため息をついてみる。

しかしそんな気持ちも、そうかまだか、と椅子に座り直し窓の外を見つめる緑李を見ていると晴れていってしまう自分が怖い。

「さて……出来上がりました」

「うむ、感謝する」

鍋からよそったスープとパンを皿に盛り付け、利推は緑李の前へと差し出す。

「どうですか？」

フェリが何とかとりつくろった笑顔で問うた。

「まあ、美味ではあるな」

褒めているのだろうが、何と無く失礼な言い方だなと利推は感じた。

「では、食べ終わりましたら、もう夜も遅いですので就寝いたしましょう」

「なんだ、まだ食べ始めて間もないというのに、せっかちな男だな、そなた」

緑李は不機嫌そうに言うが、努力のかいあってか、利推はそろそろ理性を取り戻し始めていた。

「もう夜が遅いので」

「そうか。まあ、仕方あるまいな」

冷静にその声を聞いているとふと、女の声が思いのほか低いことに気づいた。とても優美で、細い腰で、繊細な顔立ちをしているのに、その低さが目立たなかったのはおそらくこの女の性格のせいだろう。

低い、とは言っても、やはり美声である。

この女が普通の女であったとしても、おそらく利推はこの声に聞きほれてしまっていたことだろう。フェリもそうらしく、困った人だと思いつながら、あまり怒ってはいないようだ。聞こえによつては男の声にも聞こえるので、脳が勝手にそう解釈しているのかもしれない。人というのは、嫌なことがあれば無意識のうちにごまかしてしまうことが多いと聞く。

「さて、と」

これまた嫌味なほどの優美な仕草で緑李はフォークを置いた。銀食器に似せた、偽物ではあるが美しい皿はカタンと音を鳴らす。彼女がたてたその音さえ愛しい——ではないではない。

取り戻したと思っていた理性が再び奪われていることに利推は気づき、ため息をつく。

——まあ、たまには……。

惚れるというのも、良いものなのかもしれないな。

しかしその思いは、次の瞬間打ち砕かれた。

「さて、そなたら、寝るとか言っていたがそうはさせんぞ。私は暇だ。何か話をしてみせよ」

何がどう、運命がどう動いても。たとえ神の啓示でも。
こんな女に惚れたくは無い。

面倒事に慣れている利推でも、さすがにそう思った。

もつぱらの噂、発動【6】

結局眠らずに緑李の暇つぶしに付き合わされた利推とフェリは、目の下にクマを作ってきらきらと光輝く朝を迎えた。

「うむ、もう日の出か。いい朝だな」

どこがだ。

利推は女の無神経さに呆れつつ、傍らのフェリを見やる。少し疲れているようだった。

「大丈夫ですか、フェリさん？」

覗きこんで聞くと、フェリは笑って首を降る。その仕草がどうにも幸薄なものに見えて、利推は曖昧にただ微笑んだ。彼女は一日かけて、このエルバラッシュに来た。それは自分も同じで、男とはいえども、その日数は彼女の五倍だ。五日間、道とは思えぬような道を歩き、食料を切り詰めて旅をした。途中ではフェリを助けるため、剣を抜いて軽い戦闘までした。半ば迷子であった利推をフェリがエルバラッシュにつれてきてくれ、やっと休める——そう思った矢先のこの出来事。フェリも利推も、疲れないはずがなかった。

そんな事を考えると、利推はフェリに対しての哀憐の情が心の中に渦巻いて、ただ笑うしかなかった。

「ところで、二人とも。わざわざつき合わせて悪かったな。これは礼だ」

緑李は、薄い笑みで笑いあう二人の間に、ずんと封筒を差し出す。

「ああ、これはどうも……」

利推は少し驚きながらも、封筒を受け取った。疲れているせいか、紙が重く感じる。ぱら、と音をたて、封筒が開く。フェリが横から覗き込んできた。

「これは……」

「どうだ？ 宿の滞在料金は遥かに上回るであろう。私は機嫌がいいのだ。良かったな」

笑う緑李は本当に美しい。備えられた気品は文句の付け所がなく、朝飯が欲しい、と何かをねだる声も心地よい。仕草も優美で、何も言えない。この方は神なのではないか。そう錯覚してしまう。

そうだ。このお方は神なのだ。
でなければ。

あの絹のような、美しい緑の髪を一本入れて——それを手渡し、宿の滞在料金、などと言うわけがない。

きつと彼女は神なのだ、そうなのだ。
でなければ、こんなにも自信満々で生きていけるはずがない。

利推はあらぬ方向を見つめ、フェリはただその髪を凝視していた。

そして、この女は——エルバラーシュで、有名になった。

朝早く、朝食を食べてすぐに彼女はこの町を去ったのだけれど、それでも有名になった。フェリと利推が、台風が去ったときのような安堵感を示していたのに対し、彼女を一目見た村人は絶世の美女がすぐにこの村を去ってしまったことを悔やみ、見ていない村人はそのあまりの噂に、拝めなかったことを悔やんだ。

戯れに、利推は緑李から貰った髪をその夜居酒屋で出してみたのだが、これがとてもよく売れた。何でも、生まれた娘のお守りにして、美人になるようにと願をかけるのだという。たしかに、装飾品としても使えてしまいそうなその髪は、少し手放すのが惜しかった。そして、その髪の代金は、緑李が言った通り、宿の代金を遥かに上回っていた。

利推は、その半分をフェリへと渡した。半分、とは言っても、宿の代金よりはやはり上だ。フェリは驚いたようであったが、まあたしかにそれほど美人でしたものねと笑った。

利推はそんなフェリに別れを告げた。利推が去るそのとき、フェリは、あの若い門番は首になったということ話を話した。利推は小さく笑い、そうですかと言った。

緑李のことが広まったことで、若い門番のしたことも町中に知れ渡っていた。そんな者を、置いておくことなど出来なかったのだらう。

さて、夜に開門させ、朝まで聖職である門番の姪を暇つぶしにと付き合わせた絶世の美女、緑李は——エルバラーシュで、もっぱらの噂である。

もっばらの噂、発動【6】（後書き）

とりあえず一章、終わりました。

多分二章の更新は遅れ気味になると思うのですが、読んで下さる方は待って頂ければ光栄です。

この小説は、本当に書いているのが楽しかったです。緑李が特に私が美人好きだって事も、恐らく関係していると思うのですが。

それでは。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5595d/>

もっばらの噂

2010年10月10日15時29分発行